

全国規模の調査データによるシャイネスの年代差の検討

——性別ごとの分析も含めて——

澤海 崇文^{1,2} 稲垣 勉^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²流通経済大学 ³鹿児島大学 ⁴筑波大学

本研究は、恥ずかしさの度合いを表すシャイネスの年代差を見るべく、シャイネス尺度での得点が年代間でどのように異なるかを調査した。シャイネスを測定する尺度（特性シャイネス尺度：相川，1991）を含むインターネット調査を実施し、16歳から69歳の幅広い年齢層から構成される1448名が日本全国から参加した。シャイネスに対して全体的に性別よりも年代による違いが観測され、40代で高くなる傾向が観測された。シャイネスと年齢の関係は、一般的な相関分析では検討できないような曲線相関が読み取れた。しかし、本研究で得られた年代差は発達的变化ではなく時代的变化による影響も考えられるため、今後は対象者のシャイネスの程度を長期間追うような継時的な比較が望まれる。

キーワード：シャイネス，年代差，性差，曲線相関

1. 問題と目的

恥ずかしがり屋の程度は、心理学ではシャイネスと呼ばれる。シャイネスとは、“特定の社会的状況を超えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群”と定義されている（相川，1991）。シャイネスは万人に共通の感情であるとされ（Zimbardo, 1977），シャイネスを経験したことがない人はほぼいないといえる。大学生を対象とした岸本（1988）や相川・藤井・澤海（2012）の調査では、80%を超える回答者がシャイネスを感じた経験があると報告している。

しかし、その度合いは人によって変わってくると思われる。シャイネスの程度が個人によってどう異なるかという点の検討に関しては二つのアプローチが可能であろう。一つは性別に着目してシャイネスの性差を取り上げる研究、もう一つは年齢もしくは世代によってシャイネスがどう異なるかを見る研究である。増田・岸本（1990）は幼児を対象とし、シャイネスの程度を測定したが、性差および年齢差ともに観測されなかった。小学生を対象とした相澤・山根（2015）では、学年差は見られなかったが、性差が観測されて男子よりも女子の方がシャイネスの程度が高かった。Cheek & Krasnoperova（1999）は思春期までの人を対象とし、シャイネスの度合いを年齢間で比較したところ、シャイネスは幼児期から思春期にかけて上昇し、14歳から17歳頃にピークに達するという。

以上の先行研究は思春期までの人が対象となっていたが、青年期以降にシャイネスがどう変化していくかという点について、また性別間で違いがあるのかという点について、日本人を対象とした検討はなされていない。仮に、特定の世代でシャイネスの程度が高いといった結果が観察されるならば、シャイネスを改善するトレーニングやプログラムが特にその世代に向けて必要とされると考えることができる。したがって、シャイネスの高さが世代を通じてどのように変化するかを検討することは重要な研究テーマである。そこで、本研究ではシャイネスの発達的变化に検討を加えるため、日本人を対象に全国規模のインターネット調査を実施して、幅広い年齢層のデータを集め、各世代の人が平均的にどの程度の高さのシャイネスを感じているかを、性別を考慮に入れて検討する。

2. 方法

2.1 調査参加者 調査実施時にインターネット調査会社のモニターであった日本人1448名（男女各724名，年齢範囲16—69歳）が回答した。日本全国のモニターを対象に，年代ごとにほぼ同数の参加者をサンプリングした。

2.2 シャイネスの測定 特性シャイネス尺度（相川，1991）をシャイネス測定のために使用した。尺度は16項目から構成され，5件法（“1 全くあてはまらない” — “5 よくあてはまる”）で回答を求めた。性別や年齢，居住地域といったデモグラフィック変数への回答も求めた。なお，調査には本報告に含まれない尺度も同時に測定されていた。

2.3 手続き 調査は2016年3月に実施された。調査参加者は，調査会社より案内されたURLにアクセスして回答した。

3. 結果

3.1 シャイネスに関するデータ処理 特性シャイネス尺度は逆転項目を処理し，十分な信頼性があることを確認した（ $\alpha = .920$ ）のちに，相加平均を算出した。得点が高いほど，シャイネスが高いことを示す。また，年齢を10歳区切りの年代に変換した変数（e.g., 10代を1，20代を2というように順序尺度に変換したもの）も続く分析で使用することとした。

3.2 年齢とシャイネスの相関関係 シャイネス得点と年齢との相関係数を算出すると， $r = -.050$ （ $p = .056$ ）となり，有意に至らなかった。次に性別ごとに同様の相関係数を算出したところ，男性では $r = .015$ （ $p = .688$ ），女性では $r = -.112$ （ $p = .003$ ）となり，女性において年齢が上がるほどシャイネスの程度が下がる傾向が読み取れた。

3.3 年代とシャイネスの関係 相関分析では曲線相関などの非直線的な関係を検討できないため，性別および年代ごとにシャイネス得点の平均値を求め，図1に示した。

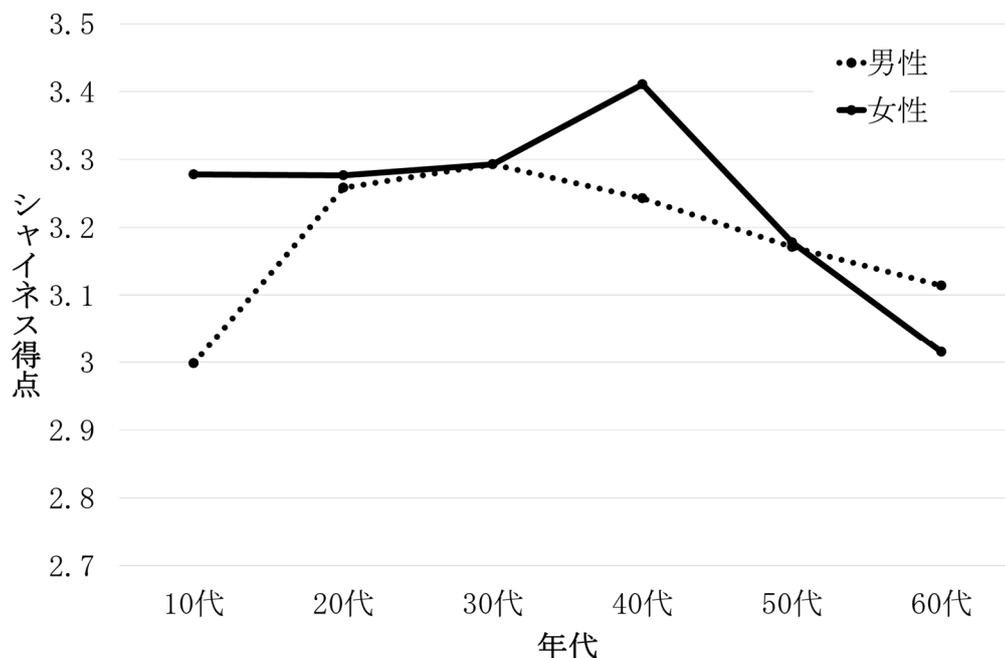


図1 性別および年代ごとのシャイネス得点

性別（男女の 2 水準）および年代（10 代から 60 代までの 6 水準）を要因とした参加者間 2 要因分散分析を実施したところ、性別の主効果は $F(1, 1436) = 2.779, p = .096, \eta_p^2 = .002$ となり、有意ではなかったが、年代の主効果は $F(5, 1436) = 4.860, \eta_p^2 = .017$ となり、有意な効果が観測された。Tukey 法による 5%水準の多重比較で下位検定を行ったところ、性別によらず、10 代に比べて 40 代でシャイネスが有意に高く、60 代に比べて 20 代、30 代、40 代でシャイネスが有意に高かった。なお、2 要因の交互作用は有意ではなかった ($F(5, 1436) = 2.204, p = .052, \eta_p^2 = .008$)。

4. 考察

本研究は、1400 名以上の調査参加者にシャイネスを測定する尺度への回答を求め、その得点が性別、年齢もしくは年代によって異なるか否かを検討した。相関分析の結果から、女性においては年齢が上がるほどシャイネスが下がる傾向が示唆された。しかし、シャイネスと年齢の関係を検討する上で、二者が直線的な関係にあるか否かは一概にいえず、年齢ではなく年代にまとめて再分析を行った。その結果、全体的に性別によってシャイネス得点が異なるという結果は見られなかったが、年代によってシャイネス得点が異なるという傾向が観測された。具体的には、40 代においてシャイネスが高くなる傾向が見て取れた。

この結果については、40 代は壮年期から中年期に移行する時期であり、このようなライフステージの変化がシャイネスの程度に影響していると解釈できるかもしれない。ただし、本研究で取得したデータは 1 時点のみのものであり、解釈には注意を要する。今回見られた年代差が発達的变化によるものか、時代的变化によるものかは結論付けられない。シャイネスの発達的变化について検討するためには、今後は縦断的な調査が望まれる。

本研究の結果は、日本人では主に 40 代のシャイネスが高いという結果が得られたが、40 代の当人たちがシャイネスを変えたいと思っているか否かは別の議論が必要である。また、シャイネスを変えられるかどうかという信念が、シャイネス変容に影響することが考えられる。今後は、これらのことを測定する尺度も含めて (Beer, 2002)、各年代においてのシャイネス変容のニーズや、シャイネス可変性の信念も測定されることが期待される。

5. 参考文献

- 相川 充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 心理学研究, 62:149-155
- 相川 充・藤井 勉・澤海崇文 (2012) 現代におけるシャイネスのイメージ調査—24 年前との比較—, 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 33
- 相澤直樹・山根隆宏 (2015) 児童期後期における社交不安 (シャイネス) の発達的变化—対人場面における他者の意図の判断との関連から—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 8:67-75
- Beer, J. S. (2002) Implicit self-theories of shyness, *Journal of Personality and Social Psychology*, 83:1009-1024
- Cheek, J. M., & Krasnoperova, E. N. (1999) Varieties of shyness in adolescence and adulthood. In L. A. Schmidt, & J. Schulkin (Eds.), *Extreme fear, shyness, and social phobia: Origins, biological mechanisms, and clinical outcomes* (pp. 224-250). New York, NY: Oxford University Press
- 岸本陽一 (1988) シャイネス (shyness) に関する予備調査, 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 803
- 増田公男・岸本陽一 (1990) シャイネス (Shyness) に関する研究 IV, 日本教育心理学会第 32 回総会発表論文集, 156
- Zimbardo, P. G. (1977) *Shyness: What it is, what to do about it*. Reading, MA: Addison-Wesley

